宮城いきいき便り

大黒舞伝承が生きがい

石巻校　西條一衛さん（77）

東日本大震災で甚大な被害に遭った石巻市雄勝町の出身。今は同市大門町に住む。若い頃は船に乗り込み、ロシア方面まで出漁。その後、養殖の手伝いをしていたが引退した。知り合いが学園の卒園生。入学案内をもらったことがきっかけで、2年間学んだ。

学園では修学旅行委員長を務めたほか、社交ダンスクラブで文化祭に向けた練習を楽しみ、講義にも興味を持って熱心に聴いた。ボーリングやパークゴルフも上達した。

「修学旅行はきちんと企画・実行できるかどうか心配でしたが、皆の協力があって責任を果たすことができた」と振り返る。

学園の仲間とよく話すようになったり、ボランティア活動の際も進んで説明するようになったりと「自分が変わった」。授業の朝に駐車場であいさつした時、相手が元気がなかったり顔色が良くなかったりすると気遣うし、自分も頼まれれば何でもやるようになり仲間意識が強くなったと感じている。

一番の思い出は文化祭で「大黒舞」を披露したこと。石巻市雄勝町水浜の作楽神社に伝わる舞で、本来は13歳（厄年）の男子が奉納する。大黒舞を復活させるため、西條さんがいろいろと調べていることを知った学園の仲間が、文化祭で披露することを決めた。

西條さんは唄を担当。「大黒舞をPRでき、仲間へ感謝の気持ちでいっぱい」と喜ぶ。

学園入学のきっかけは震災での被災体験も大きい。震災当日は石巻市中心部に買い物に来ていたが、寄り道しないで帰り、家に着いて休んでいる時に地震が起きて避難した。津波が想像以上に高かったが、すぐに避難したので助かり「運が良かった」と振り返る。

震災直後は地区の皆さんと周辺の片付けをしながら炊事用のガスボンベを集めたり、畳を集めたりと忙しく、車で移動するためのガソリンを調達することが一番の苦労だった。水が混入したガソリンをドラム缶に入れ、分離させて抽出したが、船員の時に得た知恵を役立てることができたという。

卒業後は早くも同期会の話が出ている。「皆とボランティア活動を続けていきたいし、子どもたちに大黒舞を伝承していくことに生きがいを感じている。後輩には初対面で自分の特技などの自己紹介ができるようにしてほしい」ときっぱり話す。

仲間と一緒にキンボールを楽しむ

社交学・交友学を学ぶ

大崎校　山田正則さん（66）

この春、宮城いきいき学園を卒業する2人に、学園生活の思い出や今後の抱負を語ってもらった。

60歳で退職し俳句作りを楽しみ、絵の創作にも挑戦したかったが体調が悪く踏み出せずにいた。2年後、体調が落ち着いたことから大崎市鹿島台の俳句教室に入り、俳句全般を学んだ。

そんな時、月1回ほど絵手紙を送ってくる、現在いきいき学園石巻校に通う「退職同期の中で唯一交際のある友達」から「おれも行くから君も行け」と勧められ、それぞれ学園に入学した。

「これまで人と接することを極力避けてきたので学園や同期生になじめず、ぶぜんとした態度で心の扉を開こうにもさびついていて苦労した」と振り返る。

学園での主な活動の一つ、パークゴルフはしたことがなく「やる人がやればよいと思っていた」。

そんな気持ちに大きな変化が起きた。「1・2年交流パークゴルフ大会」が雨で順延となった時も皆が笑顔で参加。「生きがい健康づくり大崎地区大会」も雨でパークゴルフが中止となったのに、選手やお手伝いの方が集まりレクリエーションを楽しみ、盛り上がる姿に感動した。

学園の修学旅行で皆と打ち解け友達になり、朝の集いも笑顔が広がるようになった。文化祭では1年生の時にコーラスとフラダンス、2年生ではコーラスと踊りを披露。練習も負担に感じず、楽しかった。

学園に入学してから、自分でも驚くほど社交家に変身。子どもたちには「父がこういう人とは知らなかった。もっと早く変わってほしかった」と言われ、「これまで悪いことをした」との思いが膨らむこともある。

同期の皆からの声掛けや叱咤激励を受けながら2年間を過ごし、社交学や交友学を学んだことは、これからの人生を見通す上で最も貴重なものとなった。

「学園でいろいろなことを学んだ。卒業後は町内の地区役員として運動会やゴルフ大会などに積極的に参加し、地区に恩返しをしたい。卒業を機に同期会を結成するので、皆と一緒にボランティア活動をするのが楽しみ」と張り切る。

仲間と一緒にやっている絵手紙をこれからも続けていく。新しい挑戦としては洋画を描き、美術展への出品を目指す。「自分のための学習だったが、言葉に尽くせぬ交友が最大の収穫となった」と真摯に語る。

大崎校文化祭でコーラスを披露